

二〇〇(北)の山塊が南北約三・五(北)、東西約五(北)に広がっている。南岳(標高一二〇〇(北))、および中岳、北岳(ともに標高一九〇(北)前後)の三峰からなる英彦山からの眺望は、由布岳や九重連山などを望むことができる。一帯は国定公園に指定されており、樹齢一二〇〇年と言われる国の天然記念物である鬼杉をはじめ、杉の巨木が林立するほか、標高約一〇〇〇(北)より上はブナ林が多く植生しており、豊かな自然に恵まれた山である。古くから吉野、熊野と並ぶ三大修験道の霊場として長い歴史があり、山中にある坊舎の数は三八〇〇にも上った。また、神話と伝説の舞台としても有名である。御祭神が天照大神の御子、天忍穗耳命(あめのおしほみのみこと)であることから「日の子の山」、即ち「日子山」と呼ばれたことに英彦山の名前の由来があるとされる。

西部方面へ目を向けてみると、勝山町から福岡市へは、まず田川市を含む田川盆地、飯塚市を含む飯塚盆地の二つの盆地帯を挟み、三郡山地を経て、福岡平野にある福岡市へと至る。田川盆地、飯塚盆地を含む筑豊平野には一級河川である遠賀川が流れており、響灘へと注ぐ。その流域面積は一〇二六平方(北)で、この流域内での人口密度は九州で一番多い。馬見山の山腹、海拔九〇〇(北)余りにある滝を源流とするこの川の総延長は六一(北)(九州で十一番目の長さ)で、上流から河口域の平野部には住宅地や農地などが広がっている。石炭産業全盛期には川

が汚染された時期もあったが、今ではかつてのように鮭が遡上する南限の河川として人々に親しまれ、その流域内には、北九州国定公園と耶馬日田英彦山国定公園の二つの国定公園が指定されるなど、自然環境が多く残っている。この遠賀川は、郡名であった「岡縣(おかのあがた)」の岡が変化した「遠賀」を用いた河川名であるが、一時期は郡名が「御牧郡」に変わったことから、「御牧川(おまきがわ)」と呼ばれていたこともあった。

勝山町から各市までの距離を見てみると、勝山町(勝山町役場、北緯三三度四一分五五秒、東経一三〇度五五分一三秒付近)から福岡市(福岡市役所、北緯三三度三五分二四秒、東経一三〇度二四分三秒付近)までの直線距離は、平成十四年改正の世界測地系で約四九・七(北)となる。同様に、北九州市(北九州市役所、北緯三三度五三分二秒、東経一三〇度五二分三〇秒付近)との直線距離は約二一・〇(北)である。これらに比べ、勝山町の東に接する行橋市(行橋市役所、北緯三三度四三分四五秒、東経一三〇度五八分五八秒付近)との直線距離は約六・七(北)と非常に近く、この行橋市と勝山町は国道二〇一号线によって繋がっている。

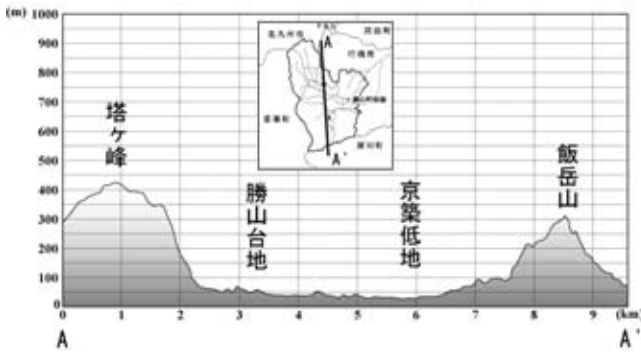
二 勝山町とその周辺

勝山町は、東は行橋市、西は田川郡香春町、南は犀川町、北

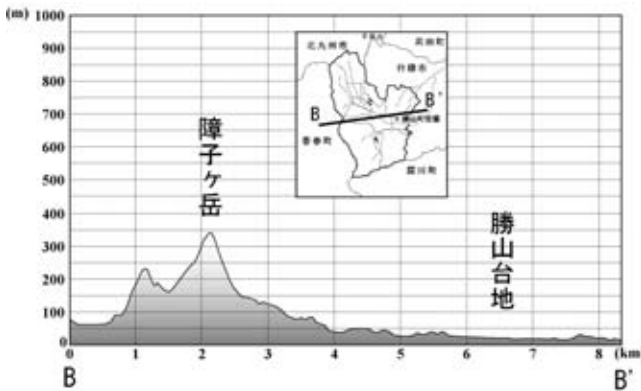


図1-1 概略図

は北九州市小倉南区に接する(図1-1参照)。地球観測衛星データ(二〇〇一年四月十九日観測)による勝山町周辺図(口絵(勝山町周辺衛星画像))に示すように、勝山町は北、西、南の三方面を山地に囲まれており、北部には貫山(標高七一一・六メートル)を主峰とする貫山地、北東部の黒田と行橋市との境界には、平尾台の東に位置する観音山(標高二三二メートル)、南西部には福智山(標高九〇〇・八メートル)を主峰とする福智山地が位置す



(a)断面図(塔ヶ峰—飯岳山)



(b)断面図(彦山川低地—黒田)

図1-2 勝山町断面図

る。これらの山地と東部に広がる京築低地に囲まれた勝山台地上に勝山町が位置する。西部方面の福智山地を越えると、田川盆地に属する彦山川低地が広がっており、その低地を英彦山に源を発する彦山川(延長三七・七キロメートル)が貫流している。この彦山川は直方市で遠賀川と合流する。

図1-2は、平尾台の南に位置する塔ヶ峰(標高三九六・一メートル)から勝山町の南東部に位置する飯岳山(標高五七三メートル)までの南北方向約九・六キロ(図1-2(a))、彦山川低地から勝

山町西部に位置する障子ヶ岳（標高四二七・三メートル）を經由して黒田までの東西方向約八・三キロ（図1—2（b））の勝山町断面図である。

これらの図を見てみると、周防灘から広がる京築低地から勝山台地までは緩やかな傾斜の平野が広がるものの、勝山町が緑豊かで比較的急峻な山地や丘陵に囲まれた台地上に形成されているのがよく分かる。町内の東部や長峡川の沿岸を中心に低地や台地が広く分布し、そこに農業用地が広がっている。集落は町内にほぼ分散して立地している。南部の丘陵地では二つのゴルフ場が開発され、周辺では工場も立地するなど、他の地域に比べると土地の人工的改変が比較的進んでいる。

これらのことを踏まえて、勝山町周辺と、勝山町における地形環境について見てみることにする。前述したように、勝山町は北、西、南の三方面を山地に囲まれており、北東部には貫山、北西部には竜ヶ鼻（標高六八〇・六メートル）、西部に障子ヶ岳、南東部に飯岳山が位置する。このうち、平尾台の北端にある貫山を主峰とする貫山地は、竜ヶ鼻を南端として、田川郡と京都郡の境界を成すように小倉南区まで連なっている。この貫山地は広義の意味での福智山地に属しており、さらにこの福智山地は筑紫山地に属す。貫山は、円錐状の丸い山容を呈しており、秋にはススキが生い茂ることでも有名である。その展望は北九州市を一望できるほどで、平尾台の中でも最高峰となる。竜ヶ鼻

は平尾台の最南部に位置し、南北に長く、平坦な地形を呈している石灰岩でできた山である。

貫山地上に広がる平尾台は、勝山町北西部に位置する石灰岩地域特有のカルスト地形を持つており、標高三七〇〜六八〇メートル、北東から南西に約六キロ、北西から南東に約二キロにわたって台地状に広がっている。この平尾台ではカルストからなる羊群原（ようぐんばる）といわれる特有の地形が広がっており、北九州国定公園に指定されている。この平尾台で見られるカルスト地形は、石灰岩が雨水などの水によって溶かされてきた地形で、さまざまな形を成している。カルスト地形は大きく分けて地表地形と地下地形に分けることができるが、地表地形には、石灰岩が溶けてできたすり鉢状、あるいは溝状の地形である凹地形と、溶け残った石灰岩が羊のような形となった凸地形とがある。地下地形には、鍾乳洞や地下川などの地下水によって形成されたものが見られる。平尾台には百を超える鍾乳洞（石灰洞）が存在し、国指定天然記念物である千仏鍾乳洞（長さ約七一六メートル）や、長さが二〇〇メートルを超える目白洞などがある。これらの鍾乳洞では、さまざまな動物の化石も多く出土している。

障子ヶ岳と飯岳山は、福智山（標高九〇〇・八メートル）を主峰とする福智山地に属する。この福智山地は田川郡香春町の香春岳（標高九〇〇・八メートル）を南端とし、北九州市八幡東区の皿倉山

まで連なり、北九州国定公園の中核をなす。比較的急峻な地形を呈しており、浸食谷が発達しているため、滝が多く、全体的にさまざまな変化に富んだ地形を成す。林野庁制定の「水源の森百選」にも選ばれている福智山水源林（面積四三六^{ヘクタール}）には、アカガシやクマザサなどの天然林が多く残っており、多くの自然と生物の貴重な生息空間を形成している。また、福智山地は広義で考える場合、前出の貫山地や北九州市門司区周辺の企救山地、同じく北九州市の若松区周辺の石峰山地、および田川市の金国山（標高四二一・六^{メートル}）を主峰とする金国山地から構成される。この山地の主峰である福智山は、北九州市小倉南区、直方市、田川郡赤池町の境界に位置する山で、三六〇度の展望が可能な山頂からは、福岡県内の山々を見渡すことができる。英彦山六峰のひとつに数えられ、修験行事も多く行われていた。

障子ヶ岳は、勝山町松田と田川郡香春町との境界に位置する山で、勝山町民の歌にも出てくる、町の象徴的な山である。標高はあまり高くないが、周囲の山々が低いため、山頂からは周囲の山を見渡すことができる。山頂には中世の城郭である障子ヶ岳城跡があり、この障子ヶ岳城は牙城跡とも呼ばれ、建武三年（一三三六）に足利尊氏の命によって足利統氏^{むねうじ}が築いたとされ、元和元年（一六一五）の徳川家康の一国一城令によって廃城となったと伝えられている。戦略上の重要な山城として、

幾度か戦場となっている。馬場跡や本丸跡などが、急峻な山の上にある草原状の山頂に残っており、山城の姿を偲ぶことができる。

飯岳山は、田川郡香春町と京都郡犀川町との境界に位置し、猪岳（いのだけ）、あるいは大坂山とも呼ばれる。山頂には、現在テレビ中継塔があるが、平安時代の祭祀遺跡も確認されている。また、その昔、南北朝時代には仲津郡と田川郡とを結ぶ戦略的な要地として関が設置されることもあった。

この飯岳山と北方の障子ヶ岳との間には、勝山町と香春町とを結ぶ仲哀峠があり、当時、迂回路がほとんど存在しなかったことから、古来より交通の要衝であった。名前の由来は、時に仲哀天皇にまつわる伝説があったことによる。この峠には、明治二十三年（一八九〇）にトンネル（旧仲哀トンネル、または旧仲哀隧道と呼ぶ、四三二^{メートル}、幅三・六^{メートル}、高さ二・七^{メートル}）が完成し、昭和七年（一九三二）にはバスが開通しているが、勝山町からの入り口への道は九十九折となっており、交通量も増えたことから筑豊一の難所と言われた。当時は、石炭等の運搬などにも利用されていた。坑口は馬蹄形切石、その外周門部は煉瓦積となっている。その後、昭和四十二年（一九六七）に、交通量の増加とトンネルの老化により、全長一二三〇^{メートル}の新仲哀トンネル（当時九州で三番目の長さ）が開通し、それに伴って国道二〇一号が新たに南に新設され、交通の便が飛躍的に向上し

た。また、この仲哀峠の北方、障子ヶ岳北麓には、仲哀峠と同様に勝山町と香春町とを連絡する味見峠があり、昭和五十八年（一九八三）に味見トンネルが開通している。

勝山町の東側には京築低地が広がっているが、この低地は長峡川、今川、祓川の三つの河川によって堆積した平野である。

このうち、竜ヶ鼻に源を発する長峡川は、勝山町の中央部を南東方向へ貫流している二級河川である。この長峡川の支流である、上矢山や矢山を下る矢山川、上田を下る初代川や、行橋市において長峡川と合流する柵見川、孫目川などの河川が勝山町の平野部を流れており、これらの河川を灌漑に利用することで、勝山町は肥沃な水田地帯を形成している。

しかし、勝山町はもともと、瀬戸内地方の気候の影響を受けており、雨量が少ない地方で、度々干ばつの被害に遭っている。特に黒田においては、享保十七年（一七三二）の大飢饉の際に多数の犠牲者が出ている。このことから、灌漑設備が整備されるまでは、ため池が灌漑用水として重要であった。寛永年間（一六二四～四四）に黒田忠兵衛が長川村の北の山地に加廊戸池、長迫池を築き、黒田村に水路を引いて数十町の耕地を開いたのはじめ、ため池のほとんどが江戸時代に造られたものであり、新田開発も行われた。現在でも町内には多くのため池が残されている。

第二節 勝山町の地形と地質

一 勝山町の地質の特徴

勝山町の周辺を取り巻く山地の主部は、北北東から西南西に連なって配列する三郡変成岩類から構成されている。障子ヶ岳から飯岳山（大坂山）にかけての稜線付近から西側斜面がこれに相当する。また北部の貫山地の山稜付近は平尾台へと続く古生代の石灰岩が分布する。一方、障子ヶ岳から飯岳山（大坂山）などの町西部の山地の斜面の下方や、中央部から東部にかけての観音山の山塊、および町内の丘陵・台地・低地の基盤岩は、三郡変成岩形成後に貫入したマグマが地殻内部で冷却して形成された花崗岩類から構成されている。勝山町を構成する基盤岩類は、周辺部に三郡変成岩類や古生代の石灰岩が分布し、中央部から東部にかけて、新しく入り込んだ花崗岩体から構成される構造となっている。

町内各地に分布する丘陵や台地の表面は、浸食された花崗岩の上に堆積した河川の堆積物（段丘礫層）が見られるほか、ところによっては阿蘇山から噴出した火砕流堆積物（阿蘇四火砕流）に覆われていることもある。また、低地に沿って広がる新しい河川堆積物（沖積層）に覆われる地域も、長峡川沿いなど